

贈汪倫
オウさんにおくる

李白乗舟將欲行
リハクがふねで さりゆくところ
忽聞岸上踏歌聲
ふときしべから かどでのいわい
桃花潭水深千尺
ここのらのふちは ふかいというが
不及汪倫送我情
およびはしない このなさけには

53

汪倫に贈る
李白舟に乗って將に行かんと欲す、忽ち聞く岸上踏歌の聲。桃花潭水深さ千尺、及ばず汪倫我を送るの情に。

* 恥じらいもなく自分の名から詩が始まり、そんな彼を足を踏みならし歌いながら見送る汪倫という気のいい酒造りの男。なんとも微笑ましい情景だ。

靜夜思
しずかなよる

牀前看月光
ねまのあたりに つきかげおちて
疑是地上霜
ふとみまちがう にわのしもかと
舉頭望山月
こうべをあげて つきながめれば
低頭思故郷
こうべはたれて ふるさとおもう

54

靜夜思

牀前月光を看る、疑うらくは是れ地上の霜かと。頭を挙げて山月を望み、頭を低れて故郷を思う。

* 漢詩においては、月光と望郷は深いつながりがあるようだ。承句（第二句）の「疑是」というのがこの詩のヘソとなっており、後半の見事な対句に繋がっている。